

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月5日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究 B

研究期間：2009～2012

課題番号：21730517

 研究課題名（和文） 若年者キャリア教育プログラムの開発
 —ワーク・ライフ・バランスへ向けた支援—

研究課題名（英文） Development of career support program for youth

研究代表者

安達 智子 (ADACHI TOMOKO)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40318746

研究成果の概要（和文）：

若者のキャリア選択と支援について検討を行い以下の成果を得た。

- (1) キャリア探索は、自己理解、情報収集、他者から学ぶという3側面から測定でき、とくに他者から学ぶことが初期キャリア形成の要となる。
- (2) キャリア自己効力が興味や関心につながることを検証し、自己効力の情報源をもちいた介入ワークを考案した。
- (3) 職業ステレオタイプが形成・維持される心理メカニズムを検証し、それを適用したワークを考案した。
- (4) キャリア意識の変動性に着目した検討を行い、選択や支援におけるダイナミズムの重要性を提言。

研究成果の概要（英文）：

The current project examined career decision and support targeting youth. The following outputs were obtained.

- (1) Career exploration can be assessed by three aspects, those are, self-understanding, information gathering, and learning from others. Learning from others is the key point in early career development.
- (2) It was verified that career self-efficacy leads to interests. A work sheet which incorporated informational sources for self-efficacy was devised.
- (3) The mechanism of forming vocational stereotypes was tested and a work sheet applying the mechanism was designed.
- (4) A study focusing on the changes in career attitudes was conducted. Dynamisms in career decision and developments were also proposed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：若者，キャリア発達

1. 研究開始当初の背景

わが国では、少子高齢化にくわえて、生き方や働き方の多様化を背景に、私生活と仕事生活の調和がとれた働き方への希求が高まりつつある。また、性別によって役割が分断されてきた仕事社会も、最近になって変化がみられるようになった。男女ともに伝統的に異性が多くを占めてきた分野への相互参画がすすみ、今後もそのスピードは加速することが期待される。

一方で、男女の生き方や働き方には、いまだに性別による差異が根強く残されたバランスを欠くものであることも多く、その背景には、さまざまな心理メカニズムが働いている。こうしたことを念頭に、本研究では、若者のキャリア形成プロセスに関わりをもつ心理的要因に着目した検討を通じて支援や介入の方向性について考察した。

2. 研究の目的

本報告では、以下にあげる(1)～(4)のリサーチ・クエスチョンにもとづいた調査研究の成果を紹介する。

(1) 最近わが国の大学機関では、入学して間もない時期から学生に対して将来のキャリアへの方向付けを行うようになった。しかし、ほんの少し前まで高校生で受験勉強に励んでいた若者に対して、どのような方向づけが出来るのか。彼らは毎日の大学生活のなかで、将来のキャリアに向けて何が出来るだろうか。また、どのような活動が彼らのキャリア形成にとってプラスに働くのか。ここでは、若者のキャリア発達を促す探索活動のあり方について検討する。

(2) わが国では、子どもの理科嫌いや若者達の科学離れの現象が深刻化している。また、さまざまな支援が提供されているにも関わらず、女性の科学技術者の数は伸び悩んでおり、この領域における男女のバランスは実に偏りが激しい。ここでは、若者達の科学技術領域に対する関心に影響を及ぼす心理的要因は何であるのかを考える。科学技術領域の知識や技術を身につけることは、個人のキャリア選択肢の幅を広げるだけでなく、科学技術領域に対する理解や関心などの社会的態度に結びつき、ひいては科学技術立国日本の立て直しに寄与することになるだろう。

(3) 男女平等や共同参画の呼び声も高らかな今の時代に、なぜ、男性職と女性職の垣根が取り払われずに残されたままなのか。この、水平的職域分離現象の背景にある職業ジェンダー・ステレオタイプをとりあげて検討す

る。ここでは、人々のステレオタイプの形成に影響を及ぼすと思われる第一の要因、従業者に占める男女比率にくわえて、我が国の労働市場において男女間に開きがみられる職業変数である給与、労働時間、年齢もとりあげ、これら4つの職業変数とステレオタイプの関連について比較検討する。これらの検討をつうじて、ジェンダーバイアスや職業にまつわる思い込みに気づかせ、いかにキャリア選択の可能性を広げるかというキャリア支援の方向性について考える。

(4) 意識と支援のダイナミズム

キャリア心理学の領域では、自己効力、動機づけ、決定、成熟など、さまざまな概念をもちいて、キャリア選択プロセスの理解と支援について研究が行われてきた。そして、その多くでは、こうした指標の点数が高くなることが望ましいという前提のもとに支援や教育が提供されている。だが、キャリアにまつわる人の心の捉え方は、そのように静的で絶対的なものなのか。環境との相互作用により変化しつづけるダイナミックなものではないのか。ここでは、「適職信仰」、「受身」、「やりたいこと志向」という3つの側面をもちいて、若者に特徴的な意識を調査し、キャリア意識の変動性やダイナミズムを捉えることを試みる。また、そうしたダイナミズムを考慮した支援について考察する。

3. 研究の方法

本研究は、調査法によってデータを収集した。国内では大学、短期大学、専門学校における授業を利用した一斉調査、および、インターネット調査を実施した。インターネット調査では、大学在学中の学生にくわえて、大卒者からも回答を得て比較分析をすることで、今の若者層に特徴的な傾向を浮き彫りにすることにつとめた。比較研究にもちいた国外のデータについては、フィリピンの大学機関から協力を得て調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 若者に必要なキャリア探索とは

キャリア形成のプロセスにおいて、若者たちは試行や探索を繰り返しながら将来の選択へつなげることを課題としている。本研究は、わが国の大学生、なかでも就職から時間的にも心理的にも遠い段階にある低学年の若者が、毎日の生活のなかで行えるキャリア探索活動に焦点をあてた。というのも、わが国の高等教育機関では、キャリア教育必須化の流れを受けて、低学年のうちからキャリアについて考えさせる働きかけが行われるようになった。しかし、大学に入学して間もな

い学生が、日々の生活のなかで行えるキャリア行動とはどのようなものなのか。わが国ではこの点に関する議論が不十分であった。したがって、初年次から行われるキャリア教育では、科学的根拠のないままに“何となく良さそうなこと”，“ためになりそうな活動”を行っているケースが少なくない。

本研究では、「自己理解」と「情報収集」という伝統的な2側面に「他者から学ぶ」という新たな側面をくわえて3つ側面からキャリア探索について検討した。結果として、仕事にまつわる情報を集めたり、働く人から話を聴いたり講演会に足を運ぶなどのかたちで、外の世界へ向けて探索を行うことの有要性が示された。就職活動への準備といえ、いわゆる自己理解や自己分析が強調されがちである。しかし、社会との接点を欠いた自己分析は危ういものでしかない。世の中の仕組みや動きを理解し、働く人々の多様な視点を得たうえで自己理解がもとめられる。

キャリア教育やガイダンスの担当者は、彼らの探索活動が、自己と社会の双方にバランス良く向けられているかを確認しておく必要があるだろう。本研究で扱ったキャリア探索ツールは全13項目からなる簡易尺度であり、日本の若者のキャリア選択、とくに、低学年でも行えるキャリア探索の状況を手軽にチェックすることが出来る。同尺度を実施することで、その時点での活動状況をセルフチェックすることが可能となる。くわえて、項目内容を吟味することで、自身に足りない活動を認識し、今後の活動の指針を得ることが出来る。

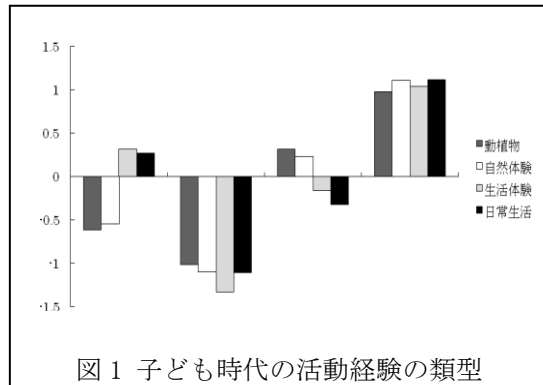
(キャリア探索の具体的な項目内容は以下の論文に収録されている 安達智子 2008 女子学生のキャリア意識—就業動機、キャリア探索との関連—、『心理学研究』, 79(1), 27-34.)

(2) 何が若者の心を科学技術の領域へと向かわせるか

高齢化、高度情報化、グローバル化と目まぐるしく変化する現代社会において、科学技術を担う人材を確保することは豊かな国民生活の実現に欠かせない重点課題である。そうしたなか、危惧されるのが若者の科学技術ばなれである。2010年に内閣府が行った調査結果は、若い世代における科学に対する関心の低下を如実に示すものであった。また、科学技術領域では、古くより多くの従事者を男性が多くを占めており、女性の参入はいまだ足踏み状態が続いている。

ここではまず、仕事活動への自己効力と科学技術職への興味の関連性を分析した。その結果、ものを組み立てる、機械を操作するなどの活動への自己効力(現実的自己効力)と、動植物の具合がわるいところを探す、健康に

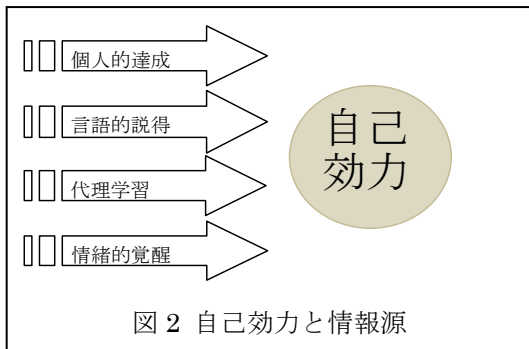
ついて話し合うといった活動への自己効力(研究的自己効力)が、科学技術職への興味につながっていた。勉強や学問だけでなく、こうした活動の経験機会を与え、「やれば出来る」という感覚をもたせることが科学技術領域への関心に結びつくといえる。



自己効力の研究領域では、過去の達成経験が、その形成や変容に関わりをもつことが指摘されてきた。そこで、大学生や大卒者が、過去の子どもの時代にどのような活動を経験しているかを調べた。

得られたデータをクラスター分析したところ、図1にしめすように4つの活動群が抽出された。左端から順に、タマゴを割る、蛍光灯をつけかえるなどの活動経験が豊富な「日常生活体験群」、いずれの活動も不活発な「消極的活動群」、動物の世話をする、川で泳ぐなどの経験を多くしている「自然・動植物体験群」、すべてについて活発に経験している「積極的活動群」である。

各群における出現比率を調べたところ、既卒者は在学学生よりも、男性は女性よりも、理系は文系よりも自然体験群や生活体験群が多かった。すなわち、年代が高い者は若者よりも、男性は女性よりも、そして、理系の学生は文系の学生よりも、子ども時代にさまざまな遊びや活動を経験しており、それが、自己効力を介して科学技術領域への興味につながるといえる。言い換えるならば、科学技術の領域へと人の関心を向かわせるのは、机の上で行う学習や実験室実験だけではない。小さい頃から自然に触れる体験、家庭のなかでのお手伝いなど、さまざまな事柄が人の心を科学へと向かわせる。また、実際に体験するだけでなく、これまでの体験を振り返り再解釈すること、他者から評価をされることによっても自己効力は形成、変容する。フィリピンとの比較調査では、日本人の学生がフィリピン人の学生よりもこうした活動経験に乏しく、それが低い自己効力につながることが示唆された。



自己効力と情報源の理論にしたがえば、科学技術職に限らず、自己効力の低い今の若者に大切なのは、勉強以外のさまざまな事柄を体験すること（個人的達成経験）、さまざまな活動を行うロールモデルを得ること（代理学習）さらに、周りからの肯定的な解釈や評価を受け取ること（社会的説得）、そして、おちついた心身の状態を保つこと（情緒的覚醒）である。こうしたことの積み重ねによって自己効力が培われ、興味・関心へとつながっていくであろう。キャリア支援や介入の場面においては、時間や労力の制約によって、こうした情報源そのものに直接介入することは不可能なことがある。その場合は、こうした情報源と自己の関連づけを振り返り吟味したり、自分の解釈のくせを知ること、自己効力を再評価すること等を内容としたプログラムが有効になる。

（2013 年の刊行予定の図書③にて、自己効力の情報源を扱ったワーク・プログラムが掲載される）

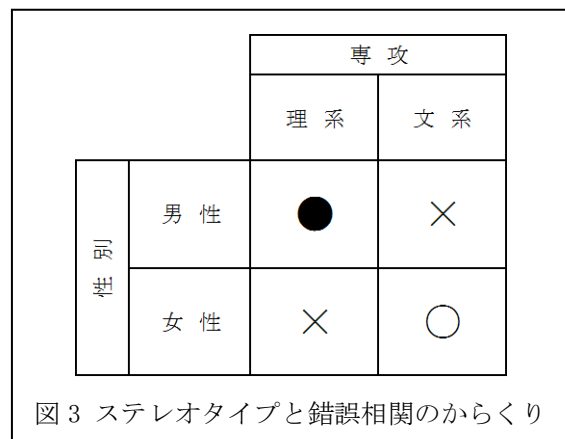
（3）キャリア選択の男女差とステレオタイプ

“漁師は気が荒い”，“学者は理屈っぽい”，“銀行員は生真面目”など、私達の社会にはさまざまな職業ステレオタイプがみられる。そうしたなかでも社会で広く流布しているのが“大工は男っぽい”，“保育士は女らしい”など、性別と職業を関連づけたタイピングである。そして、このタイピングには、その職業に多く従事する人の性別が関わりをもつことが知られている。

職業と性別の関連を心理学的視座から検討したもの多くは、人々がもつ主観的な男女占有率（男性が多い仕事だ、女性が担う仕事だなど）とステレオタイプの関係を明らかにしてきた。しかし、実際の男女占有率とタイピングがどの程度関連するのか、また、他の要因と比較した場合の関連度合いはどうかを論じた研究は蓄積が少ない。そこで本研究は、男女占有率にくわえて、我が国の労働市場で男女差のみられる職業変数である給与、労働時間、年齢もとあげて、ステレオタイプの関係を明らかにした。

具体的には、賃金構造基本統計調査（厚生労働省、2010）から得られた男女比率をもとに、男性職 10（ex.大工、守衛、システムエンジニア）、中性職 10（ex. ビル清掃員、百貨店店員、薬剤師）、女性職 10（ex. 栄養士、幼稚園教諭、看護師）、合計 30 職業を抽出した。そして、それぞれの職業に対する男らしさ、女らしさの印象をたずねた。その結果、働く人の男女比率と“男らしい”，“女らしい”というステレオタイプは非常に強く関連していた。一方、男女占有率の影響を除いたときの、職業変数群とステレオタイプの関連はごく弱いものとなった。つまり人々は、仕事内容やワークスタイルなどの詳細を知るまえに、単純に「男が多いから男の領域」，「女が多いから女がする仕事」と頭のなかで分離させているのだ。

このような、ステレオタイプはいちど形成されると払しょくすることが容易ではないことが多くの研究で明らかにされている。何故ならば、我々が思い込みをしているとき、頭のなかでは、実際には関連しない 2 つの物事をまるで関連するかのよう結びつけると錯誤相関が起きているからだ。例えば、「男は理系、女は文系」というステレオタイプをもつ場合、人々の頭の中では、図 3 のなかの●の部分、あるいは○の部分のみに着目しており、×の部分の情報を頭からシャットアウトしていることが多い。このような、情報の偏りに気付くことが、若者を固着した考えから解き放ち彼らのキャリア選択肢の幅を広げることになるだろう。



キャリア教育やキャリア支援では、世の中に流布するステレオタイプ、固定的な観念、それらの影響力に気づかせることが大切なポイントとなる。くわえて、男女占有率のようなシンプルで目につきやすい職業変数だけでなく、仕事特性、ライフスタイル、変化や発展性など、多様な視点から情報を集めて吟味し職業理解をすすめるよう若者達を方向づけることが求められる。

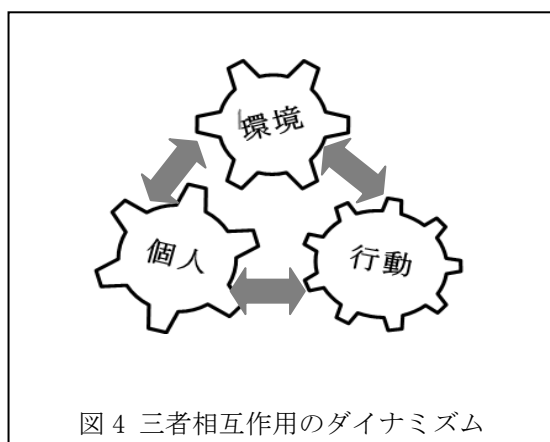
(2013年の刊行予定の図書③にて、この理論的枠組みを活用したワーク・プログラムが掲載される)

(4) 意識と支援のダイナミズム

いつかぴったりの天職に巡り合えるだろうという「適職信仰」、今は動かなくてもそのうち何とかなるという「受身」、好きな事ややりたい事を仕事にしたいという「やりたいこと志向」、これらの3側面は実に“今どきの若者的”であり、支援や働きかけをするときに扱いつらく問題視されてきた傾向であった。しかし、さまざまな層を対象としてキャリア意識の傾向を測定したところ、これらは必ずしも不適応的ではないこと、また、そのときの状況によって変化し得ることが示された。

たとえば、在学生と社会人の間でこれらの意識を比較したところ、社会人になると現実と直面することから、ぴったりの天職に出会えるだろうとの「適職信仰」は低くなっていた。一方、どうにかなるだろうという「受身」は高くなる傾向がみられた。また、正社員として働く者のなかで、転職志望者と転職を志望しない者の比較を行ったところ、転職志望者の特徴として、「やりたいこと志向」と「適職信仰」の高まり、そして、「受身の低さ」が見出された。つまり、正社員になる＝キャリアの完成系ではなく、正社員になった後も、そのときどきの価値づけや展望、文脈によって、キャリア意識は変化し続けるのだ。また、キャリア意識は、婚姻や子どもの誕生といったライフイベントによっても変動するというダイナミックなものであった。

キャリア教育や支援にあたるものは、ただ、上げればよい、決定すればよいという一方向的な働きかけではなく、図4に示すような三者相互作用のダイナミズム(Lent, et al. 2004)を念頭におきながら、支援をおこなっていく必要があるだろう。



すなわち、キャリア選択は、個人の能力、興味、認知、個人をとりまく社会や労働市場

などの環境、そして個人がおこす行動という3つの要素が相互に影響を及ぼしながら変化しつづける力動的な発達プロセスといえる。したがって、若者へのキャリア教育や支援において使用する各種ワークやプログラムにおいても、力動的視点にたったものを取り入れていく必要がある。ブランド・ハップンスタンスや、キャリア構築理論等を、わが国の社会的文脈に適合したかたちで活用していくことが望まれる。

(キャリア意識のダイナミズムを扱ったデータは、現在分析の途中であり、ひきつづきの検討課題としたい。本年度の秋に縦断調査の第2回目のデータを採取し、意識の変動と適応について分析を行い、それを反映させたワーク・プログラムを作成する予定である)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 安達 智子, キャリア探索尺度の再検討『心理学研究』, 査読有, 81(2), 2012, P132-P139
- ② 安達 智子, 女子は理系が苦手?—「私にも出来そうだ」は何に規定されるか—, 『進路指導』, 査読無, 84(1), 2011, P13-P22
- ③ 安達 智子, 科学技術職への興味とその規定因—自己効力と男女差に着目した検討—, 『心理学研究』, 査読有, 83(5), 2012, P479-P488
- ④ Tomoko Adachi, Occupational Gender Stereotypes: Is the ratio of women to men a powerful determinant? 『Psychological Reports』, 査読有, 印刷中
- ⑤ Tomoko Adachi & Teresa B. Lirag Self-efficacy for Science Careers: A Comparative Study between Japanese and Filipino University Students, 査読無, 印刷中

[学会発表等] (計7件)

- ① 安達 智子, 職業に対する自己効力—女子は男性職が、男子は女性職が苦手?—, 2010, 日本教育心理学会第52回総会(早稲田大学)
- ② Tomoko Adachi, Relationship between occupational gender stereotypes and self-efficacy among female university students in Japan, 2011, CDAA International Career Conference 2011(Australia)

- ③ 安達 智子, 若者の目に映る 性別職域分離, 2011, 日本心理学会第 59 会大会 (日本大学)
- ④ 安達 智子, 日本の青年のキャリア選択 (Die Berufswahl japanischer jungen Menschen), 日独青少年定期交流事業 (独立行政法人国立青少年教育振興機構)
- ⑤ 安達 智子, どうして大工は男で, 保育士は女か?— タイピングの情報源 —, 2012, 日本教育心理学会第 54 回総会 (琉球大学)
- ⑥ 安達 智子, 若者のキャリア意識と性役割態度—平等主義者は意識が高い?—, 2012, 日本キャリア教育学会第 34 回研究大会 (滋賀大学)
- ⑦ 安達 智子, 若者のキャリア意識のとらえ方と働きかけ, 2013, 発達心理学会第 24 回大会 (明治学院大学)

[図書] (計 3 件)

- ① 安達 智子, キャリアの心理学—選択にまつわる心のメカニズム—, 安藤香織・杉浦淳吉編著, ナカニシヤ出版, 『暮らしの中の社会心理学』 P135-P143
- ② 安達 智子, キャリア選択の性差: 棲み分け現象の心理メカニズム, 若松養亮・下村英雄編著, 金子書房, 『詳解 大学生のキャリアガイダンス論』
- ③ 安達 智子・下村英雄編著, 金子書房, ワークでみつけるわたしのキャリア (仮題), 2013 刊行予定 (第 1 章, 2 章, 6 章, 11 章)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安達 智子 (ADACHI TOMOKO)
 大阪教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号: 40318746